〈論　　文〉

デンマークにおけるユグノーの役割

金　哲　雄

1　はじめに

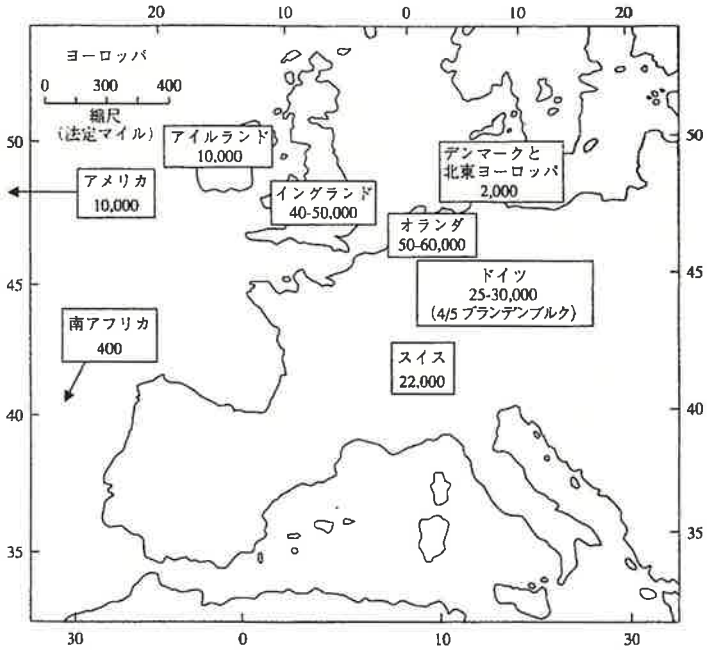
拙稿「移民史とユグノーの経済活動」[(1)] において、移民史に関する最近の研究成果を踏まえ、ゾンバルトの移住論やヴェーバーの近代資本主義論から、ユグノーの経済活動が移民史、移民の経済史、とくに近代資本主義の発展過程においてどれだけ重要な位置を占めているかを明らかにした。また、拙著『ユグノーの経済史的研究』[(2)] においてイギリス、オランダ、ドイツ、スイスの移住先におけるユグノーの経済活動について論ずるとともに、今後は、デンマーク、スウェーデン、ロシアなどにも対象を拡大し、「ユグノーの経済史的研究」をさらに深めていくことを課題にした（図１参照）。

デンマークは当時、スウェーデン、ロシアと同様に、数多くの移民を受け入れるにはあまりにも遠くて貧しい国であった。フランスのカルバン派であるユグノーは、比較的優位でより歓迎を受ける移住先を求めた。1530年にデンマークで採用されたアウクスブルク信仰告白（La confession d`Augsbourg 、ルター

(1) 金哲雄「移民史とユグノーの経済活動」大阪経済法科大学『経済学論集』第38巻第２号、2015年３月参照。
(2) 金哲雄『ユグノーの経済史的研究』ミネルヴァ書房、2003年、161～238ページ参照。

派）は17世紀後半、デンマークを絶対的に支配していた。1660年の革命（フレゼリク３世FrédéricIII即位）は、すべての権力を君主に集中させることによって、国家のいかなる宗教も変えさせない義務を課していた。正統なルター派は当時、カルヴァンの教理を危険な異端なものとしてみなしていたのであった。移住がブランデンブルクに広がっていた時、デンマークにおけるマニュファクチュアの繁栄のため、移民を受け入れるべきかどうかが議論された。1681年、ユグノーに対する竜騎兵の迫害（dragonnades）を機に心を動かされた、クリスチャン５世（ChristianV）は、ユグノー移民に避難地を求めさせ、教会を設

図１　ルイ14世治世下におけるユグノー移住先と移民数



（出所）Robin D. Gwynn, *Huguenot, Heritage. The history and contribution of Huguenots in Britain.* (London, 1985, p.24.)に基づいて作成。

立し、いかなる宗教活動に迫害を加えないように保護することを宣言した[(3)]。

デンマークを含め北東ヨーロッパへのユグノー移民数は、約2000人にといわれているが、デンマークへの移民数は明確ではない。来住のユグノーは、大いに歓迎を受けた。貴族にはフランスにおけるのと同様の身分が、軍人には同様の地位が与えられた。マニュファクチュアに従事しようとする者は、住居や前払いの資金が提供され、特権や免税を享受したのであった。このような国王の勅令によって、デンマークへの移住は促進された。そして、その移住先は主としてコペンハーゲン（Copenhague)、アルトナ（Altona)、フレゼリシア（Fridéricia）であった[(4)]。このような諸都市でユグノーは、大きな役割を果たすことになる。

以上のような問題意識に立脚して、本稿では、ユグノーの移住と密接に関連していた、デンマークの宗教改革と絶対王制の時代について言及し、デンマークにおけるユグノー移民の定住状況とともに、とくに、最も重要な職業であり、その貢献度が高いと思われる農業部門における役割を明らかにしていきたい。

2　デンマークの宗教改革と絶対王制

（1）宗教改革

デンマークの宗教改革は16世紀前半、カトリックからプロテスタント（ルター派）に転じる宗教改革が行われた。1517年にマルティン・ルターが「95ヶ条の論題」を提出したことにより宗教改革が始まり、1520年代には宗教改革の嵐はデンマークまで達した。

クリスチャン２世（在位1513～23年）は都市経済を育成し、ハンザの特権を

(3) Charles Weiss, *Histoire des Réfugiés Pretestants depuis la révocation de l'Édit de Nantes jusqu'à nos jours*, II, (Paris,Charpentier,1853), pp.285-287.

(4) Ibid.,p.287.

消滅させ、貴族の分権的支配と戦い、教会の独立を制限した。しかし、これらは貴族の反乱を引き起こし、王は1523年亡命し、のち投獄された。そして、当時の大貴族、教会はフレゼリク１世（在位1523～33年）を擁立し、古い貴族、教会、ハンザの特権を復活させた。しかし、ヴィッテンベルクで1522年から25年にかけてルター派の神学を学んで帰国したハンス・タウセンが福音主義の説教を始めると、フレゼリク１世は密かに彼を教会の圧力から守った[(5)]。

他の司祭と修道士もルターの教えを広め始め、カトリック教会の莫大な財産と、カトリック教会の国家運営への口出しを批判した。当時はカトリック司教と高級貴族が、王とともに国を治める枢密院に座っていた。カトリックの司教は激怒し、ルター派の司祭と修道士を逮捕して異端者としての宣告を求めた。公的にはカトリックであったフレゼリク１世は、自分の憲章ではカトリック教会を守り、プロテスタントを打ち破る義務があった。しかし、彼は、ルターの教えには、例えば、王が教会に対して決定権を持つと唱える点でとてもよいものがあると思い、ルターに賛成し、憲章を破って、司祭と修道士に説教をする許可を与えた。もしかしたらフレゼリク１世は、カトリックとプロテスタントが平和的に共生できると思っていたかもしれないのである[(6)]。

また司祭は、よいプロテスタントは神を信じるだけではなく、商人であろうと小作人であろうと、勤勉であり、社会の自分の場所に満足しなければならないとし、神はまさに社会を創造し、それぞれに社会の中の一つの場所を与えてくれたと説いた。職人と商人は、子どもが学校に行くのは有益だと考え、宗教の義務的教育のほかに、読み書きも学ばせた商業都市では、教育は決まってよりうまくいったのであった。そこでは、少年だけを受け入れたラテン語（当時の国際的言語）学校が設けられた。教育は無料で受けられ、生徒には食事、服、寮が与えられた。全教育修了者には、官吏になる者もおれば、司祭になるために大学で学んだ者もいた[(7)]。

---

(5) 百瀬宏・熊野聡・村井誠人編『北欧史』山川出版社、1998年、133～134ページ。
(6) イェンス・オーイェ・ボールセン著、銭本隆行訳『デンマークの歴史教科書』明石書店、2013年、124ページ。
(7) 同上、126ページ。

このように、フレゼリク１世は貴族やカトリックの支持を受け即位したことから表面上、プロテスタントの布教を批判したが、デンマーク国内でのプロテスタントの広まりを容認したのであった。

フレゼリク1世は1533年、死去した。その長子クリスチャン３世（在位1534／36～59年）はルター派であった。教会、王国参事会、ハンザは彼を嫌い、リューベックの軍隊を率いて戦争（1534～36年、「伯爵戦争」）を起こした。この戦争で、クリスチャン３世は勝利し、シューベック・ハンザのバルト海支配は終末に向かった。クリスチャン３世は1536年、コペンハーゲン包囲戦に勝利した直後、７人のカトリック司教を逮捕し、ルター派改革に抵抗しない条件で釈放した。彼はコペンハーゲンに聖職者を除き、貴族、市民、農民から構成される身分制議会を招集し、王位が承認された。クリスチャン３世は、全耕地の三分の一をこえる教会領を没収したのであった[(8)]。このようにデンマークは、宗教改革を実施し、ルター派の国家となった。

（２）絶対王制

フレゼリク３世（在位1648～70年）は1657年、トシュテンソン（1643～45年）での敗北を挽回すべく、スウェーデンに宣戦布告した。戦局はデンマークに不利に展開し、スコーネ地方およびノルウェーの一部を割譲するというロスキレ条約（1658年）の締結を強いられた。スウェーデン国王カール10世はそれから半年後、デンマークの息の根をとめるべく、カール・グスタヴ戦争を仕掛け、コペンハーゲンを攻撃した。長期戦を仕入れられているうちに、カール10世が急逝し、1660年５月にコペンハーゲン条約が結ばれた。この戦争は、デンマークに経済的打撃を与えただけでなく、デンマーク人を社会的・精神的にも混乱させた。危機的状況に陥ったデンマークは、なんらかの政治的変革を余儀なくされていった[(9)]。

1660年９月、経済的危機を打開するために、身分制議会がコペンハーゲンに

(8)『北欧史』、134～135ページ。
(9) 同上、153ページ。

招集され、選挙王制から世襲王制への政体変更の提案が行われた。1662には、地方行政システムが封臣制的なレーン制からアトム（県に相当）に変更され、64年、とくに88年には度量衡の統一など、税制改革が行われた。1665には絶対王制を法的に規定した「国王法」が成立し、また、64年には徴兵令が公布された。さらに、クリスチャン５世（在位1670～99年）は1683年、「デンマーク法」を制定した。このように17世紀後半、国王を頂点とする中央集権体制が着実に整備されていったのである[10]。

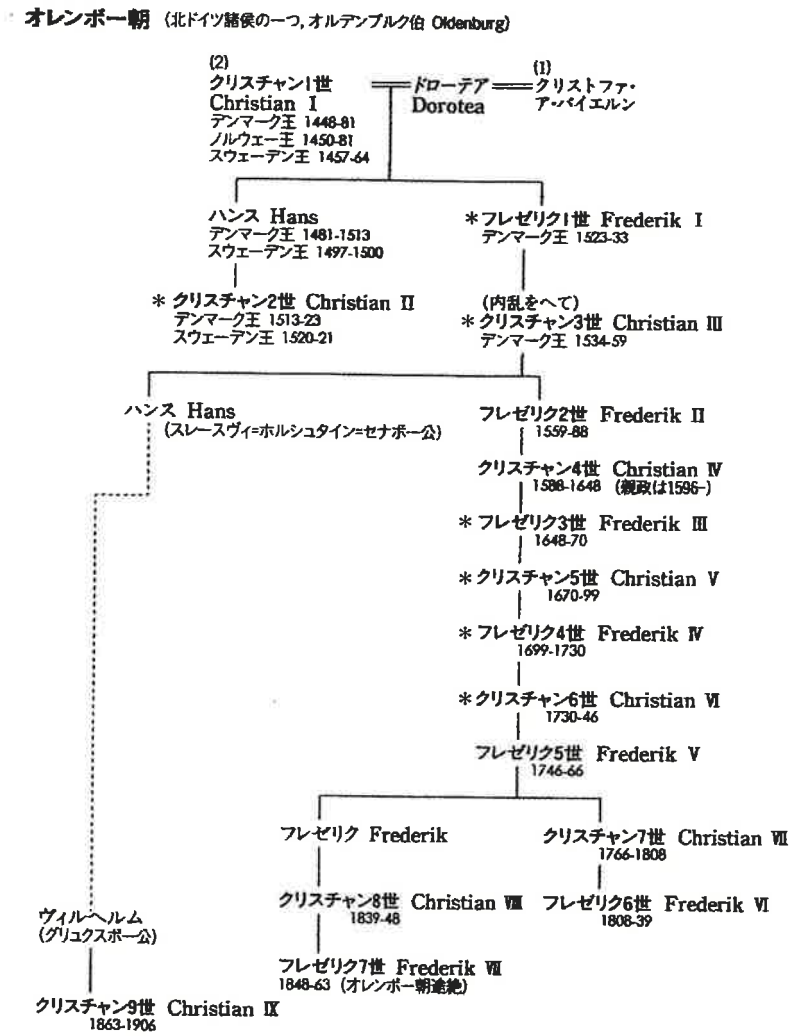
デンマーク本土における人口は18世紀前半、約70万人で、そのうち８割が農村に、残りが首都コペンハーゲンと諸地方都市半々の割合で居住していた。農村人口は、領主（貴族）、自作農、小作農、小屋住み農民および日雇い農民、奉公人、その他に分かれていていた。そのうち小作農は全農村人口の約40％を占め、自作農はわずか１％であった。６割近くは貴族所有地で、その半分以上は国王側に与する新貴族および外国人貴族のものであった。旧来の貴族が宮廷貴族化しなかったため、彼らは、ホルシュタインや北ドイツから登用されていたのであった[11]。

農業はデンマークの最も重要な職業であった。国家的財政危機を克服するために、農業生産に取りかからなければならなかったが、うまくはいかなかった。1650年代の戦争と、後に続いた飢餓と疾病で、８分の１の国民が命を落とすとともに、多くの屋敷、畑、家畜が失われた。そこへ、穀物の価格が下がり、穀物を外国へ売って稼いでいたデンマークにとって問題が生じた。このような価格の下落は、イングランド、ポーランド、ロシアがヨーロッパの市場で穀物を売り始めたせいでもあったが、1730年ごろにはじめて、穀物の価格は上がりはじめ、農民にとってよりよい時代となった[12]。

フレゼリク４世（在位1699～1730年）の時代は、その大半が大北方戦争に費やされて国力が疲弊し、国家財政も逼迫していたが、1720年のスウェーデンと

(10) 同上、153～156ページ。
(11) 同上、161ページ。
(12)『デンマークの歴史教科書』、143ページ。

図２　ユグノー移住関連のデンマーク王家系図



（注）＊は本稿において記述されている王名。
（出所）百瀬宏・熊野聡・村井誠人編『北欧史』（山川出版社、1998年、070ページ）に基づいて作成。

の講和により財政状況は徐々に改善した。次のクリスチャン６世（在位1730～46年）は、宗教に凝ったため、厳格な敬虔主義が支配的になった。そして、18世紀最大の農業危機の最中1733年には「土地緊縛制」（14～36歳の農民男子をその出生地に拘束）が導入された。この制度は、安価な農業労働力を確保・固定し、民兵徴集を確実することに主眼がおかれていた[13]。

しかし、土地緊縛制は農業を効率的なものにはしなかった。1700年代後半には穀物と肉の価格が上がったため、王は、どうすれば農産物をもっと多く生産できるかを検討する委員会を設置し、一人の農民の土地を集約させるなどを提案した。多くの農園では、新しい耕作方法を試みたが、しかし、成果はなく、不満が高まり、農民は王に訴え出るに至った。1787年に王は、このような状況を改善するために新しい委員会を設置したものの、結局は1788年、土地緊縛制は廃止され、農民階級のすべての男子に一種の兵役が課せられた。土地緊縛制廃止の実質的な意味は限定されたものであったが、大きな象徴的な意味を持ったとされている[14]（図２参照）。

3　デンマークにおけるユグノの定住状況

近代のフランスはもとより、西欧の経済史にあって、ユグノーのもつ重要性にもかかわらず、ユグノーの経済史的研究は実は極端に少ない。本格的研究としては、「17世紀におけるフランス・プロテスタントに関する研究報告書」"Mémoire sur les protestants de France au XVIIe"（1851）と『ナント勅令廃止以降のフランス・プロテスタント亡命者の歴史』*Histoire des Réfugiés Pretestants depuis la révocation de l'Édit de Nantes jusqu'à nos jours*（1853）を執筆したヴァイス（Charles Weiss）のパイオニア的研究と、『ユグノーの迫害とフランス経済の発展』*The Persecution of Huguenots and French Economic Development, 1680-*

(13)『北欧史』、161～163ページ。
(14)『デンマークの歴史教科書』、160～161ページ。

1720(1960)を刊行したスコヴィル(Warren C.Scoville)の業績が知られているのにとどまる。ユグノーのデンマークへの移住に関する資料は、筆者の知る限り、ヴァイスの『ユグノーの迫害とフランス経済の発展』が唯一のものであるといえる。それゆえ、本章「デンマークにおけるユグノの定住状況」と次章「デンマークの農業におけるユグノーの役割」については、ヴァイスのこの文献に基本的に依拠して展開していくこととする。

クリスチャン５世は、いかなる宗教活動に迫害を加えないようユグノー移民を保護するとともに、さらに、手工業者に対して入国税を免除し、忠誠を誓い、ルター派の宗教の下で子どもたちを育てることに同意するならば、８年間あらゆる課税から解放した。彼らは1685年、クリスチャン５世の妻シャルロット・アメリー（Charlotte-Amélie）のとりなしのお陰で、最後の義務から解き放された。この女王は、最も美しい徳の持ち主で、デンマークにおいて崇拝されていた。彼女は、カルヴァン派に属していたウィルアム６世の娘であり、ユグノー移民に対して共感を抱いていた。その結果、ルター派聖職者の反対や一部のスウェーデン人の敵意にもかかわらず、ユグノー移民はおおむね好意を持って受け入れられた。国王は1685年、女王の再三の要求や選挙侯の緊急な頼みにより、ユグノー移民のための新たな勅令を出した。彼自身、デンマークに定住しようとするすべての人々を受け入れ、貴族や軍人に対してフランスにおける同様な地位、身分を約束した。若い人々は、彼の指揮下に置かれた。マニュファクチュアを経営しようとする者には、住居が与えられ、資金の前払いが行われ、特権や免税が施された。この勅令は、デンマークへの移住の動きに新鮮な刺激を与えたのであった。ナント勅令廃止以前にすでに注目すべきユグノーの移住があり、その一人がロワ（Roye）伯爵で、デンマーク部隊の元帥になった。他の人々は、まもなくその流れに続いていったのである[(15)]。

デンマークとの諸取引を行っていた、ボルドー、ラ・ロッシェル、ナントの商人たちは、コペンハーゲンに移住してきた。貿易によって富裕になった、これらの家族はしばらくの間、デンマークに繁栄をもたらした。これらの状況に

(15) Weiss,op.cit.,II,pp.287-288.

おいて、その移民数はかなりの数に及び、コペンハーゲンにおいて教会を建てたのであった。オランダ国王は、教会建設を援助するため、1000ギルダーを彼らに提供した。このフランスの最初のコロニー（colonie、入植地）により輝きをもたらすため、カーンの牧師であり、カルヴァン派教会の最も著名な弁士の一人あるデュ・ボスク（Du Bosc）が引き寄せられた。彼と彼らの家族がコペンハーゲンに定住するならば、大きな利点が与えられた。彼は、かなりの数の大衆が離れた、ロッテルダムにおけるフランス教会の説教壇を受け入れることを好んだ。1699年、テオドール・ブランク（Théoodore Blanc）が招かれた。彼は、ロンドンにおけるフランス教会で６年間、牧師の職務についていた。しかし、1690年の勅令では、国際結婚で生まれた子どもたちを国で認められた宗教の下で育てることが命じられ、カルヴァン派の信仰が禁止されていたのであった[(16)]。

第二のフランスのコロニーは、アルトナ（ホルシュタイン公国に属し現在はハンブルク市の一部）で創設された。すでに1582年、その都市は、オランダの圧制から逃れた、ワロン人群衆の避難地になっていた。17世紀初めには、ホルステイン公国の一地域で1603年に教会を設立することが彼らに許され、自由にカルヴァン派の信仰を行った。この共同体は、オランダ人、ドイツ人、フランス・ワロン人から構成され、三つの言語で牧師によって説教されていた。しかし、フランス人のグループは1686年、フランスからの移民によって強化され、その結果、分離が生じた。２つの共同体が形成され、一つはフランス人の共同体であり、もう一つはドイツ人・オランダ人の共同体であった。アルトナに

(16) Ibid.,pp.288-290. ロッテルダムにおいては、ノルマンデイー出身のユグノー移民たちは、ビーバなどの毛皮から帽子を製造する技術を移植した。事実、ロッテルダムは、彼らによる帽子製造業が繁栄したのであった（Weiss,op.cit.,II,p.137）。また、時計屋であるアブラアム・フロマンテイール（Abraham Fromanteel）も、ロッテルダムおいてもイギリス投資に係わりあった）。オジエ（Augier）家もロッテルダムに居住し、イングランド銀行株式投資に関与していた。もともとこの一家は、フランスに多大な資産を保有する、経験豊かな投資家であった（A.C.Carter, "The Huguenot Contribution to the Early Years of the Funded Debt, 1694-1714", *Proceedings of Huguenot Society of London*, XIX, No.3, 1955, pp.37-38）。

は、フランス人の共同体だけではなかった。商業上の理由でハンブルクに居住していた人々も、この隣接の都市に結合されたのであった。この２つの共同体を導く牧師の中で最も有名で、後にベルリンに移住した、イサック・ドゥ・ボゾーブル（Isaac de Beausobre ）がいた[17]。

ブランデンブルクでは、ユグノーの経済活動は、すべてにとって富の無尽蔵の源泉となっていた。政府の保護によって、彼らはフランスやイギリスの大製造業者との競争を維持し、その誠実さと実践的な信仰心によって、信頼と信用を得、成功を収めることができたのであった。彼らはポーランド、ロシア、デンマーク、スウェーデンとの関係を築き、コペンハーゲン、ハンブルク、ダンチッヒで支店を設立した。また、ユグノーがハンブルクや他のドイツの諸地域でリンネル製造できわめて大きな成功を収め、フランスからイギリス、スペイン、インドの市場を奪っていた。ユグノーがブランデンブルクに成した特別な貢献は、造園術を改良し、創造することであった。ユグノーの到来までそこでは、もっとも日常的な野菜がほとんど生産されていなかった。選帝侯の食卓に出されたものは、ハンブルク、ライプチヒからのものであった。ユグノー移民、とくにメス出身のユグノーのなかで、数多くの園芸家は好んでベルリンに定住していた[18]。

フレゼリシア（ユラン半島東岸に位置し、当時のデンマークの首都）の都市は1650年、フレゼリク３世によって建設され、それ以来、「宗教改革派の畑」（le Champ des réformés）と呼ばれた。その都市は、スウェーデンによって1657年に破壊されたが、新たな計画の下、元の場所近くに再建された。フレゼリク３世は、そこを要塞地とするとともに、バルト海貿易の専売所に作り上げた。フレゼリク４世は1720年、ブランデンブルクのフランス移民、約40家族を招き、居住者が労働力不足のために未開墾として残していた土地の半分を、耕作用に彼らに分配したのであった。これら家族うち20家族は、ジーランド（Seeland、デンマーク最大の島でコペンハーゲンの所在地）に移住した。他の者は、フ

(17) Ibid.,pp.290-.291.
(18) 金哲雄『ユグノーの経済史的研究』、212～213、220ページ。

レゼリシアに留まり、その分配地を受け入れていた。そこは依然として、スウェーデンによる廃墟で覆われていた。ジーベルク（Seeberg）と呼ばれ、よく耕作されていた土地もあれば、カムペン（Kampen）の名で包囲されていた土地もあった。国王は、彼らに居住者とは違った共同体を形成することを許可し、10年間、牧師に安売りすることを約束した。彼は彼らに対して、彼らの衝突を終結させるため裁判官を選出し、そして、すべての税からの免除されることを認めた。最後に彼は、その都市の軍事司令官や司法官によって、彼らが特別に保護されるよう勧告したのであった[19]。

4　フレデリシアの農業におけるユグノーの役割

ユグノー移民は、デンマークにおける農業の発展に大いに貢献した。その一部は、アイスランド（1944年にデンマークから独立）に定住し、亜麻、麻を移植した。デンマーク半島に定着した者は、バルト海諸島やホルシュタイン（Holstein、エルベ川とアイダー川の間、現在のドイツのシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の南部地域）においてフランス農業の優れた方法を普及し、ブランデンブルクですでに栽培していた、最も重要なタバコを新たに移植した。そして、その使用は、北ヨーロッパにおいてますます一般化していった。そのかなりの額が、プロシア、スウェーデン、ポーランド、シレジア（現在のポーランド南西部からチェコ北東部に属する地域）、ボヘミア、そしてオランダにさえ輸出されていた。フレゼリク４世は1720年、フレデシアに優秀な栽培者を招き、ユグノーのコロニーを設立するのに成功した。彼は20年間、デンマークやノルウェーに入ってくる他の商品に課していた税のすべてを、そのタバコに対しては免除していたのであった[20]。

このような貿易におけるすべての変動にさらされながら、しばしば、デン

(19) Weiss,op.cit.,II,pp.291-.292.
(20) Ibid.,pp.295-.296.

マークの人々の羨望によって取引が妨害され、時には、策略や陰謀によって財産さえ攻撃の対象になったが、フレデリシアという小さな都市は、国王の期待を裏切ることはなかった。そのような障害物にもかかわらず、その都市は、18世紀後半まで繁栄続けた。そこには、500人あるいは600人で構成された、100以上の家族が形成されていた。彼らは、その勤勉的で活動的な才能によって公に評価されていた。彼らの役割によって、フレデリシアは、すばやく繁栄がもたらされたのである。早くも18世紀中葉、その繁栄は確固たるものになった。その地域の輝かしい光景は、デンマークの他の諸都市の農耕地と比較しても、その相違は著しかった。彼らが移住する前では、快い光景が見あたらなかったのが、その定住後は、フレデリシアほど良質で、大量の収穫を生み出すところはなかったのである[21]。

ユグノーの移住以来、デンマークの諸地域においてフランス栽培者によってもたらされた農業経済は、常に農地が整備され続けられた。このようにして、様々な種子を植える準備が行われた。その結果、土地が疲弊しないために年ごとに種まきに変化を与え、最良のものに変えられたのであった。この方法は、貴重な利点を持っていた。ジャガイモの栽培に組み合わされた、タバコの栽培によって、土地は整備され、小麦のすばらしい収穫がもたらされた。このように整備された土地から、大量で良質の穀物が生産された。入植者がもたらしたこの方法は、利点を持つだけでなく不可欠なものになったそのシステムを破棄しようとした栽培者がいたが、結局は、2，3年以内にそれに復帰せざるを得なかった[22]。

ユグノー移民たちは1年中、土地を占領することができなかったので、「半分だけの農園」(le plantations à demi) において新たな財源を見出した。彼らは、村の土地所有者たちによって毎年、委ねられた土地を耕作し、とくにタバコを栽培した。フランスの入植者たちは、植え込みと労働を提供し、タバコの販売時、両方の側に生産物を平等に分配した。この合意は、両者にとって利益をも

(21) Ibid.,pp.296-.297.
(22) Ibid.,p.297.

たらすものとなった。タバコの栽培によって、土地が改良され、小麦の栽培が準備できた。そして、地主に直ちに利益をもたらすこととなった。入植者は、その労働に相応する報酬を受け取った。このようにしてフランス・コロニーは、フレゼリシア地域における200ないし300トン（tonnes）の土地を耕作し、交互の耕作システムによって、それらを広大な庭園に変えた。さらには、未熟練労働者、草刈り人、刈り取る人、推薦すべき庭師に近隣の大きな財産を提供していたのであった[23]。

ユグノー移民がフレデリシアに移植したタバコやジャガイモと、完全に栽培した小麦に、キャベツ、カブラ、ネーブル、そして、それまでデンマークで知られていない他の野菜を追加した。その輸出額は、まもなくかなりの額に及んだ。これらの様々の生産物によって毎年、数多くの船は重荷を積んだ。そのデンマークの船行は、その新たな活動を受け入れた。というのも、フレデリシアの商人たちは、商業の分野で無尽蔵の富を見出したからである。彼らは、他の地域よりも三分の一多い額の小麦を販売していた。タバコだけでも毎年、15万から２万リックス・ダラー（rixdalers、旧オランダ銀貨）の利益を生んでいた。

この分野の取引はアメリカ独立戦争中、３万から３万5000リックスダラーに及んだ。それらと交換に、デンマークの住民自身が必要とする商品を購入していた。ユグノー移民の恩恵によって、18世紀初めまでは貧しい村に過ぎなかったフレデリシアは、一世紀以内にユトランド半島（Jutland、ヨーロッパ大陸北部にある、北海とバルト海を分かつ半島）における最も富裕な都市になったのである[24]。

したがって、フレデリシアの農業コロニーは、デンマークにおける商業の発展に貢献した。また、工業発展のための強力な推進力も、そのコロニーによるものであった。ユグノー移民たちは、デンマークに蹄鉄工、樽屋、織布工、ガラス屋、とくにラシャやタバコ製造の労働者を提供していた。迫害によりフランスを去った、ガラス製造業者の一人がジャン・アンリ・ドゥ・モール（Jean-

(23) Ibid.,pp.297-.298.
(24) Ibid.,pp.298-.299.

Henri de Moor）であった。彼は疑いもなく、コルベールがガラス工業の繁栄のためにフランスの招いた、オランダ人家族のメンバーだった。彼は、コペンハーゲンに定住し、そこで労働者を雇用した。デンマークにおいては、それまで知られたいなかったガラス工業は、はじめて導入されたのであった[(25)]。

フランス国王ルイ14世は、フランスがイギリスにリンネルを供給していたので、イギリスでの新たな工場がフランスのイギリスにおける市場の多くを吸収しないかどうか不安であった。彼は、大使に移住織工を説得してノルマンディーやブルターニュに戻すように命じた。ボンルポ（Bonrepau）侯爵は1686年、イプスウィッチでリンネル製造業を設立したユグノー移民の雇用労働者を、フランスに戻すことに成功した。彼らのほとんどは帰国し、彼らの工場は破滅したといわれた[(26)]。しかし、そのユグノー製造業は、イギリスを離れてデンマークに移住し、そこで同様に、リンネル工業を移植したのであった[(27)]。

フレデリシアのコロニーはまた、ユグノー移民が形成したコロニーのうち、19世紀中頃でもその影響力が最も及び続けたコロニーであった。その貢献には、いくつかの要因が関連していた。第一に、入植者自身の間で結婚を行った。彼らは、国家や条件で幸福が確実に保証されたいる人々と結びつくことを好んだ。もう一つの強力な要因は、利益であった。フレゼリク４世によって認められた特権の関係で、土地は、個人ではなく宗教改革派の家族に与えられ

---

(25) Ibid.,p.299.コルベールは、オランダからカルヴィニストであるヴァン・ロベー(Van Robais)家も招いていた。アブヴィル(Abbeville)の有名なラシャ工場は1665年、彼らによって設立された（Weiss,op.cit.,I,p.107)。彼らは、おそらく1500人ほどの労働者を雇用していたと推定される（Ph.Sagnac, "L'Industrie et le commerce de la draperie en France à la fin du XVIIe siècle et au commencement du XVIIIe," *Revue d'histoiremoderne et contemporaine*, (IX, 1907-1908), p.28)。その雇用数は6500人ともいう (J.W.Thompson."Some Economic Factors in the Revocation of the Edit of Nantes," American Historical Review, XIV, 1909, p.42)。

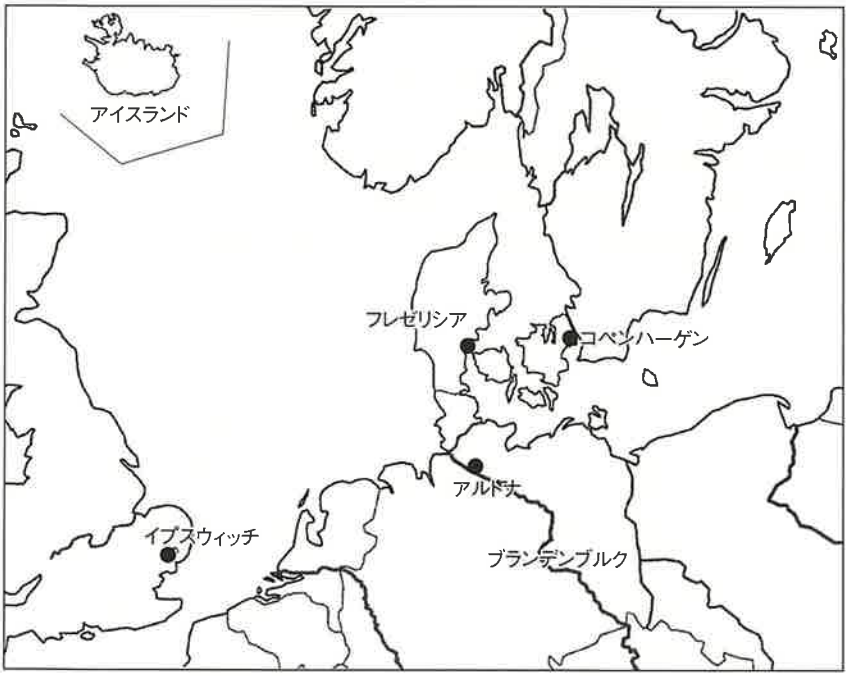
(26) Warren C.Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development, 1680-1720*, (Berkeley and Los Angeles, 1960), pp.326-.327.にもかかわらず、帆布工場や未染のリンネル工場は、その後イプスウィッチや他の諸都市に出現し、フランスからの輸入量も1680年以前より減少していた（(Ibid.)。

(27) Weiss,op.cit.,II,,pp.299-.300.

た。これらの特権は、カルヴァン派の家長両者にのみ適用された。フレデリシアのコロニーがいつも、若者たちを引き止めるのに努力していたことを追加しなければならない。最後に、彼らは、神の摂理において揺るぎない信念によって、数多くの子供たちを富の源泉として考えた。子供たちは、父親に従い、朝から仕事に従事して労働の手段を積んだ。その労働によって、彼らに幸福がもたらされ、謙虚な望みにふさわしい社会的地位がつかまれたのであった[28]。

このように、フレゼリシアのコロニーは、長い繁栄がもたらされ、最初の性格が保持された。外国のど真ん中でフランス人の共同体が維持され、19世紀中頃でも、教会ではその最初の入植者の言語で礼拝が執り行われていた。確かに、コペンハーゲンでも依然とフランス教会が存在していた。しかし、フラン

図３　デンマークへのユグノー移住関連地図



(28) Ibid.,pp.398-.309.

ス教会は、デンマークの首都においてビジネスを担っていた、フランスのプロテスタント家族の滞在の時のみ、支えられていた。コペンハーゲンのコロニーの急速な衰退はある程度、国際結婚が関連していた。アルトナのコロニーは1761年、ハンブルクのフランス移民の退出によって、２つに分裂させられた。彼らは、オランダの領事の下でのみ教会の礼拝への出席が許可されていた。アルトナのコロニーは、この離脱によって大いに縮小されたが、1831年までは維持された。その残りは当時、「宗教改革派の福音主義教会」（d'*Église* évangélique）と名乗っていた、ドイツ・オランダの共同体に結合させられたのであった[29]（図３参照）。

5　おわりに

以上のように、デンマークの宗教改革と絶対王制の時代について述べ、デンマークにおけるユグノー移民の定住状況とともに、とくに農業部門における役割を明らかにした。

デンマークの宗教改革は16世紀前半、カトリックからプロテスタント（ルター派）に転じる宗教改革が行われた。フレゼリク１世は密かにプロテスタントをカトリック教会の圧力から守り、その長子クリスチャン３世自身はルター派であった。それゆえ、デンマークは、ルター派の国家となった。また、絶対王制については、フレゼリク３世の治世を経て、クリスチャン５世の時代の1683年、「デンマーク法」が制定され、17世紀後半に国王を頂点とする中央集権体制が着実に整備されていった。フレゼリク４世の時代は、デンマークの最も重要な職業であった農業は、うまくはいっていなかったが、1730年ごろにはじめて、農民にとってよりよい時代となった。次のクリスチャン６世の時代は、厳格な敬虔主義が支配的になり、そして、1733年には「土地緊縛制」が導入された。

(29) Ibid.,pp.309-.310.

このような時代的背景の下、デンマークへのユグノーの移住、定住が行われた。そして、その定住先は主としてコペンハーゲン、アルトナ、フレゼリシアであった。クリスチャン５世は、ユグノー移民に避難地を求めさせ、教会を設立し、いかなる宗教活動に迫害を加えないように保護した。コペンハーゲンには、デンマークとの諸取引を行っていた、ボルドー、ラ・ロッシュエル、ナントの商人たちがに移住してきた。フレゼリク３世によって建設されて以来、「宗教改革派の畑」と呼ばれていた、フレゼリシアは、要塞地とするとともに、バルト海貿易の専売所に作り上げられた。フレゼリク４世は1720年、ブランデンブルクのフランス移民、約40家族をフレゼリシアに招き、未開墾土地の半分を、耕作用に彼らに分配したのであった。

ユグノー移民は、フレデシアにおける農業の発展に大いに貢献した。、その一部は、アイスランド定住し、亜麻、麻を移植した。デンマーク半島に定着した者は、フランス農業の優れた方法を普及し、最も重要なタバコを新たに移植した。ユグノーの勤勉的で活動的な才能によって、フレデリシアは、18世紀後半まで繁栄続けた。デンマークの他の諸都市の農耕地と比較しても、フレデリシアほど良質で、大量の収穫を生み出すところはなかった。ユグノーは、フレデリシアに移植したタバコやジャガイモと、完全に栽培した小麦に、キャベツ、カブラ、ネーブル、そして、それまでデンマークで知られていない他の野菜を追加した。その輸出額も、かなりの額になっていた。また、フレデリシアの農業コロニーは、デンマークにおける商業、工業の発展に貢献した。さらに、コペンハーゲンやアルトナのコロニーと比較して、フレデリシアのコロニーは、ユグノー移民が形成したコロニーのうち、特権、勤勉などの要因と関連して、19世紀中頃でもその影響力が最も及び続けたコロニーであった。

移民史に関する最近の研究成果にとして、ラッセル・キング編著『移住・移民の世界地図』（丸善出版、2001年）、ギ・シャール監修『移民の一万年史―人口移動・遙かなる民族の旅―』（新評論、2002年）、弘末雅士編『越境者の世界史―奴隷・移住者・混血者―』（春風社、2013年）、内田日出海・谷澤毅・松村岳志編『地域と越境―「共生」の社会経済史―』（春風社、2014年）などを挙げることができる。以上の移民史に関する研究成果は、移住、越境と近代資本

主義との関連が決して鮮明であるとはいえないが、とりわけ『地域と越境―「共生」の社会経済史―』は、越境を通じて起こる「共生」を社会経済史的アプローチから捉えている点で意義は大きい。移民史において経済活動はきわめて重要な要素だといえる。この視点は、ウェルナー・ゾンバルトの移住論から示唆を得たものである。ゾンバルト『ブルジョワ―近代経済人の精神史―』（中央公論社、1990年）によれば、移民はあらゆる移住先で資本主義の形成にきわめて活発に関与したし、その経済活動は16～18世紀の経済史を記述することを意味するとしている。このような視点から筆者も、「ユグノーの経済史的研究」を展開してきた(30)。

確かに、ユグノー移民は、デンマークにおいて重要な役割を果たした。しかし、イギリス、オランダ、ドイツ、スイスにおいて果たした役割と比較すると、その移民数を含めてあまり大きいものではなかったといえる。今後は、移民史に関する最近の研究成果を踏まえながら、移住先におけるユグノーの役割に関する比較研究を続けるとともに、新たにスウェーデン、ロシア、カナダなどの移住先におけるユグノーの役割について研究を進めていきたい。

(30) 金哲雄「移民史とユグノーの経済活動」2～13ページ参照。さらに、移民と経済の関連についての研究成果としては、ベンジャミン・パウエル編『移民の経済学』（東洋経済新報社、2016年）を挙げておく。本書は、移民のもたらす経済的効果の研究成果をまとめ、「移民の大量増加によって、『鍵穴的解決策』では対処できないほどの悪影響が引き起こされている証拠が得られるまでは、国際的な移民は数量制限のない世界に向かって進むべきであり、それも急ぐべきである」（同書、308～309ページ）としている。